

【丸本】戯曲『マクベス』にでてくる「晴れ晴れしいなら禍々しい、禍々しいなら晴れ晴れしい」という言葉は何を意味しているのか説明しなさい。

戯曲『マクベス』にでてくる「晴れ晴れしいなら禍々しい、禍々しいなら晴れ晴れしい」という言葉は、うそはつかないが、まがまがしい結果を引き起こす魔女の存在を表している。四幕一場では、マクベスが魔女たちの予言を聞き、自身の不安を解消しようとしている場面である。この時、マクベスは三つの幻影からそれぞれ忠告を受けたが、その内容はマクベスに都合の良いものであったため、真の意味について理解することができていなかったのである。

まず、第一の幻影はマクベスの死を表している。第一の幻影はマクベスに都合の良いように忠告をした。第一の幻影は「マクベス気をつけよ、マクダフに」(120)と言った。この言葉は、マクベスの「怖れ」(120)をピタリと言い当てていた。そのため、マクベスはマクダフに気をつければ問題ないと考え、警告をうのみにしてしまった。しかし、第一の幻影の姿は警告とは異なり、マクベスにとって悪い知らせであるということを暗示している。第一の幻影は、「胃をかぶった生首」(120)である。この姿は、マクベスに対する良い知らせとは異なり、禍々しい雰囲気演出している。そのため、この禍々しい姿は、マクベスの未来に起こる悪い事態である「死」を表している。

それだけでなく、第二の幻影による言動の裏には、マクベスの悪い未来があらわされている。第二の幻影は、マクベスに対して「女から生まれた者が、マクベスを傷つけることは断じてない」(121)と言った。女から生まれない人間など存在しないと考えたマクベスは、この言葉を過信し、もう心配することはないと思ってしまった。しかし、第二の幻影はその考えが間違いであるということ象徴している。第二の幻影は、「血みどろの幼な子」(121)のような姿をしている。これはマクダフの存在を表している。マクダフは「産み月前に母親の腹を切りさいて」(183)生まれているのである。そのため、血がたくさん付いている幼な子はマクダフであると言える。これにより、第二の幻影の言葉には当てはまらないマクダフが、危険な存在であるという真実に、マクベスは気付くことが出来なかったのである。

また、第三の幻影は、マクベスをさらに過信させ、大切な事実気付くことが出来ないように仕向けた。第三の幻影は、マクベスに、「マクベスはけっして敗れることはない、かの大いなるバーナムの森が、けわしいダンシネインの丘に攻め登ってくるまでは。」(122)と言った。この警告でも、森が攻めてくるという現実にはありえない事を言ったため、マクベスは自分が負けることはないと過信してしまった。また、「どこに謀反をたくらむ者がおろうと、きにはかけるな。」(122)と言っている。この言葉は、どんな敵にも負けることはないと思わせ、マクベスを傲慢にさせてしまった。しかし、それらの言葉の真の意味も第三の幻影の姿に現されている。第三の幻影は、「頭は王冠を戴き、手には木の枝を掲げた幼な子」(121)の姿をしていた。まず、頭に王冠を乗せて木の枝を持っている幼な子はマルコムであると考えられる。マルコムが未来で王になっていることや、少しずつ成長する苗木のように育ったという事を示しているので、マルコムにも気を付けるべきであると暗示している。それだけでなく、第三の幻影の姿は、マクベスを倒すために作った作戦を表しているといえる。マルコムたちは、マクベスを攻める際に、一人一人が木の枝をかざした姿を表している。このように、第三の幻影も言葉の裏に真の意味を隠していたのである。

以上のように、魔女が予言を伝える際に出現した幻影はマクベスに都合のいいように伝えたが、真の意味を隠している。よって、「晴れ晴れしいなら禍々しい」とは、嘘はついていないが、禍々しい結果を引き起こそうとしている魔女の事を表しているのである。